HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『中臣祓訓解』の第六天魔王譚 : 祓の解釈を支える神話
Author(s)	小田島, 良
Citation	国語国文研究, 157, 1-13
Issue Date	2021-08-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88893
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_157_01-13.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『中臣祓訓解』の第六天魔王譚
――祓の解釈を支える神話――

小田島　良

一．はじめに

無住（一二二六～一三一二）による説話集『沙石集』巻第一の冒頭話「太神宮の御事」には、伊勢神宮をめぐる次のような説話が載っている。

去し弘長季中に、太神宮へ詣で侍りしに、ある神官の語りしは、「当社には三宝の御名を言はず、御殿近くは僧なれども詣でざる事は、昔この国いまだなかりける時、大海の底に大日の印文ありけるによりて、太神宮御鉾さしくだして探り給ひける。その鉾の滴り、露の如くなりける時、第六天の魔王遥かに見て、この滴り国と成りて、仏法流布し、人、生死を出づべき相ありとて、失はんために下りけるを、太神宮、魔王にあひて、我三宝の名をも言はじ、身にも近づけじ。とくとく帰り上り給へとこしらへ仰せられければ、返りにけり。その御約束を違へじとて、僧なむど御殿近く参らず、社壇にしては経をばあらはには持たず。三宝の名をも正しく言はず。〔中略〕外には仏法をうとき事にし、内には三宝を守り給ふことにて御座す。故に我が国の仏法は偏に太神宮の御方便によれり。[1]

この説話は、無住が「太神宮」（伊勢神宮）に参詣した際に、伊勢神宮の「神官」より聞いた話とされている。無住が参詣した鎌倉時代には、アマテラスの本地を大日如来とする説が流布しており、僧侶が伊勢神宮に参詣することは珍しいことでは無かった。[2]その一方で、当時の伊勢神宮には仏法を忌避する伝統があり、僧侶が社殿近くまで参詣することはできなかった。僧侶である無住に対して、伊勢神宮の神官は仏法忌避の由来を説くが、それは「この国いまだなかりける時」という「この国」（日本）が出来る以前まで遡るとする。そして、「太神宮」（アマテラス）の「鉾の滴り」から日本が出来る際に、仏法を障碍する存在である「第六天の魔王」が現れたと述べ

る。魔王は「この滴り国と成りて、仏法流布し、人、生死を出づべき相あり」と、その滴りから出来る国（日本）には仏法が流布し、人々が輪廻から解脱する「相」があるとして、この国が出来ることを妨害しようとする。それに対してアマテラスは「我三宝の名をも言はじ、身にも近づけじ。とくとく帰り上り給へ」と、自身が仏法を忌避することと引き換えに、魔王に立ち去るよう求めたのである。このアマテラスの発言によって、魔王はその場を去っていった。伊勢神宮では、アマテラスと魔王の間で結ばれた「その御約束」を破らないために、今でも「僧なむど御殿近く参らず、社壇にしては経をばあらはには持たず。」と仏法を忌避している。

この説話を理解するために、そもそも魔王とはどのような存在なのかを確認しておきたい。魔王は仏法を障碍する存在として様々な仏典に登場するが、特に釈迦の成道（悟りを開くこと）を障碍するために天から下りて来たことで知られている。釈迦が一生に行った大事を八相と称するが、その五番目である降魔は、魔王とその配下を降伏（ごうぶく）したことを意味する。その内容を、仏伝として広く流布した『過去現在因果経』によって確認したい。

爾の時、菩薩、樹下に在りて、誓言を発する時、天龍八部、皆悉く歓喜して、虚空中に於て、踊躍讃嘆す。時に、第六天の魔王の宮殿、自然に動揺す。是に於て、魔王、心大に懊悩し、精神操擾して、声味御せず。自ら念言す、『沙門瞿曇、今、樹下に在り、五欲を捨て、端座思惟す。久しからずして当に正覚の道を成ずべし。其の道、若、成ぜば、広く一切を度し、我が境を超越せん。道の未だ成ぜざるに及んで、往いて之を壊乱せん』[3]。

「菩薩」（釈迦）が菩提樹の下で、悟りを開くまでその場を動かないという「誓言」を行うと、「第六天」にある「魔王の宮殿」が揺れ動き、「魔王」は「懊悩」した。「第六天」とは、欲望に囚われた衆生の世界である欲界の頂上にある天であり、他化自在天とも称される。なお、第六天の主は仏法を守護する神である大自在天（別名、伊舎那天・摩醯首羅）だが、『過去現在因果経』では、魔王が「摩醯首羅を射しに、即便ち恐懼して、其の善心を退けり」と、大自在天を退けたとされている。この「第六天」に住む魔王は、「其の道、若、成ぜば、広く一切を度し、我が境を超越せん。」と、もしも釈迦が悟りを開いて衆生を導けば、欲界から衆生が解脱し、その頂上にいる魔王の勢力が損なわれると考えた。そして、釈迦が悟りを完成させる前に「往いて之を壊乱せん」とした。引用部分の後には、魔王は様々な方法で釈迦の成道を妨げようとし、最後には大軍を集めて釈迦を包囲したと語られる。しかし、どうしても釈迦を菩提樹下から動かすことはできなかったのである。

是の時、魔王、〔引用者注：魔王に釈迦へ帰依するよう促す〕空中の声を聴き、又、菩薩の恬然として異らざるを見、魔、心に慚愧し、憍慢を捨離し、即便ち道を復して、天宮に還帰る。

ついに魔王は釈迦の成道を障碍することができないことを悟り、住居である「天宮」へと帰っていった。以上が釈迦の八相の一つ、降魔である。『沙石集』「太神宮の御事」もこうした魔王に対する理解にもとづいている。日本が仏法流布の勝地であることから、魔王は日本の誕生を障碍するために天から降りて来たのである。

『沙石集』「太神宮の御事」に見られるような、日本の誕生に当たってアマテラスと魔王がやり取りをしたとする説話は、中世に広く知られており、第六天魔王譚と称される。同説話は前田家本『水鏡』、屋代本『平家物語』「剣巻」等の文学作品にも見ることができる。他にも鎌倉時代に成立した伝貞慶『神祇講式』や南北朝期の『神道集』等の神祇信仰と結びついたテキスト、鎌倉末期の『古今和歌集潅頂口伝』等の『古今和歌集』の注釈書にも見ることができる[4]。そして、同説話を載せる現在確認されている最古のテキストが『中臣祓訓解』（以下『訓解』）である。

第六天魔王譚は『古事記』『日本書紀』といった古代の神話には見られないものであり、神仏習合に根ざした中世独自の神話と言える。こうした中世独自の神話は、第六天魔王譚以外にも様々なものが存在する。それらの神話が、しばしば『日本書紀』を意味する「日本紀」の名のもとに語られ、「日本紀」の権威のもとに広まっていたことが伊藤正義氏によって指摘された[5]。伊藤正義氏はこうした言説を中世日本紀と名付け、中世の文学・芸能の世界で広く共有されていたことを明らかにした。ともすれば荒唐無稽とも思われる中世日本紀だが、その影響は同時代の様々なテキストに表れており、中世の文学・芸能における重要な一角を占めている。第六天魔王譚は、こうした中世日本紀の代表として研究が行われて来た[6]。

しかし、第六天魔王譚に関する先行研究では、同説話群を全体として論じるものが多く、その際、それぞれのテキストの特殊性は捨象されることが多かった。『訓解』の第六天魔王譚に対して先行研究では主としてその古さにのみ注目が集まっていた。第六天魔王譚を収める『訓解』そのものの内容が考慮されることは殆ど無かったのである。先行研究では、なぜ第六天魔王譚が『訓解』に登場するのか、同説話が『訓解』の文脈中でどのような意義を持つのか、といった点が問われてこなかった。本論では、『訓解』の第六天魔王譚をその文脈を押さえて理解し、『訓解』の同説話に対して新しい解釈を提示する。

二、『訓解』の基本情報

まず始めに『訓解』の基本的な情報を確認する。成立については未解明な部分が多く残されているが、建久二年（一一九一）以前に成立し、伊勢神宮（外宮）の御厨であった仙宮院の周辺で撰述されたと考えられている[7]。その内容は『中臣祓訓解』という名前の通り、中臣祓と呼ばれる祝詞の注釈書である。

中臣祓とは六月晦大祓の祝詞とほとんど同一の内容を持つ祝詞である[8]。六月晦大祓の祝詞について確認しておくと、この祝詞は延長五年（九二七）に完成した『延喜式』巻八に収録されており、朝廷の儀式である大祓で用いられ、大祓詞と称される。大祓とは国中の人々の罪を祓い清める律令国家にとって重要な儀式であり、『日本書紀』によると天武天皇五年（六七六）八月辛亥の条に見えるのが最初である。中臣祓と六月晦大祓の祝詞を比較すると、六月晦大祓の祝詞の末尾が「諸々聞食止宣[9]」とするのに対して、中臣祓は「八百万乃御神達ヽ佐乎志加乃御耳ヲ振立テ聞食セト申[10]」とする。六月晦大祓の祝詞では、集まった人々に対して祝詞を聞かせる形式になってい

るが、中臣祓は神々に祝詞を聞き入れてもらう形式になっている。そうした違いはありつつも、大祓詞も中臣祓も、その主題は神々の力によって人々の罪を消滅させることにあった。

中臣祓は永久四年（一一一六）成立の『朝野群載』に載っており、平安時代から存在していた。そして、中臣祓は神道だけではなく、陰陽道や密教の儀式の中で用いられたことで知られている。中臣祓が陰陽道の中で用いられたことを示す、最も早い例と考えられるのが『紫式部日記』の寛弘五年（一〇〇八）九月十日の記事である。そこでは中宮の安産のために「陰陽師とて、世にあるかぎり召し集めて、八百万の神も耳ふりたてぬはあらじと見えきこゆ」[11]と記されている。先行研究で『紫式部日記』のこの部分が、先に引用した中臣祓の末尾と重なることから、この時に陰陽師が中臣祓を用いていたと推定されている。[12]また、平安後期になると中臣祓を用いる密教の修法である六字河臨法が成立する。[13]六字河臨法については、承澄（一二〇五～一二八二）の編纂による台密の図像集『阿娑縛抄』巻第八六「六字河臨法」に詳しい情報が載っているが、康平七年（一〇六四）に行われていたと記録されている。[14]このように、平安時代から中臣祓は陰陽道や密教において用いられてきた。中臣祓は当時の信仰の様子をうかがい知ることのできる重要なテキストである。

こうした中臣祓の受容を背景として成立したのが『訓解』である。その冒頭には「聊か覚王の密教に託て、心地の要路を略して示す而已」[15]とある。「覚王」とは仏の尊称であり、「覚王の密教」とは密教のことである。『訓解』は密教にもとづいて「心地の要路」つまり、衆生の心が悟りへ至る道を「略して示す」とする。また、その本文の末尾は「時に弘仁十三年仲夏廿五日、沙門遍照金剛」と結ばれている。「沙門遍照金剛」は真言宗の開祖・空海であり、『訓解』は空海に仮託されていることになる。『訓解』は空海に仮託し、密教の立場から中臣祓を注釈するテキストであった。なお、久保田収氏[16]によって『訓解』がその後の中世神道書に大きな影響を与えたことが指摘された。久保田氏は、伊勢神道の基礎となった神道五部書や、両部神道の聖典である『麗気記』を始め、中世の多くの神道書が『訓解』と共通する表現を含んでいると指摘した。『訓解』はその後展開されていく中世神道を準備したテキストと言うことができる。

三.『訓解』におけるアマテラス

『訓解』は本文とも言うべき中臣祓の注釈の前に、中臣祓の功徳やそこで用いる道具について説明を行う。その説明の中に、第六天魔王譚が記されている。次に引用する。

所為は、嘗、天地開闢し初、神宝日出でます時、法界法身心王大日、無縁悪業の衆生を度せん為に、普門方便の智恵を以て、蓮華三昧の道場に入り、大清浄願を発し、愛愍の慈悲を垂れ、権化の姿を現し、跡を閻浮提に垂れ、府璽を魔王に請ひて、降伏の神力を施して、神光神使八荒に馳し、慈悲慈徹十方に頒す。以降、忝くも大神、外には仏教に異なる儀式を顕し、内には仏法を護る神兵と為る。内外詞異なると雖ども、化度の方便同じ。[17]

以上が『訓解』の第六天魔王譚である。本論はこの部分の解釈を問題とする。まず、傍線部によってその概要を確認したい。「天地

開闢」の際に、「大日」つまり大日如来が「権化の姿」となって、人間の住んでいる「閻浮提」へと垂迹する。この「権化の姿」は後に「大神」とされている。この「大神」は、『訓解』が伊勢神宮の周辺で成立したことと、『訓解』の他の部分に「伊勢大神」という表現が見えることから、アマテラスと考えられる。また、「閻浮提」は仏教的世界像において人間の住む世界を意味するが、アマテラスが垂迹することからここでは特に日本を意味すると考えられる。そして、アマテラスは「魔王」に「府璽」を求める。「府璽」は御璽を意味し、統治者をしめす印である。つまり、「閻浮提」の統治者であった「魔王」より「府璽」が受け渡されることで、アマテラスが新しく「閻浮提」の統治者としての資格を得ることになるのである。以上の大筋は、第一節で引用した『沙石集』の同説話と一致するものとなっている。

ただし、『訓解』の当該部分を見ていくと、その中心にあるのはアマテラスと魔王のやり取りではなく、アマテラスの垂迹の由緒を語ることであると気づかされる。破線部を確認していくと、そこではまず「心王大日」（大日如来）が、「無縁悪業の衆生を度せん為」に「愛愍の慈悲」によってアマテラスとして垂迹したと語られる。そして「神光神使八荒に駅し、慈悲慈檄十方に領す」と、その威光と使者が国中に広がり、「慈悲」と慈悲にもとづく檄文「慈檄」[18]も国中に広まったとされる。この部分は、日本思想大系『中世神道論』の頭注で指摘されている通り、空海『三教指帰』[19]巻下「生死海の賦」に「神光神使、駅於八荒。慈悲慈檄、頒於十方」とあるのに由来する。「生死海の賦」は生死流転の苦しみの中にある衆生を、仏が説法によって救済することを説く。当該部分は、説法をするために現れた仏の「神光神使」「慈悲慈檄」が国の隅々に広がることを示す部分である。『三教指帰』の仏が衆生を救済するために説法をする場面の表現を、『訓解』はアマテラスの垂迹を表現するために用いているのである。以上のように、『訓解』の当該部分では、大枠として大日如来が衆生を救済するためにアマテラスとして垂迹したことを述べている。そして、このようなアマテラスの垂迹を述べる文脈中に、「府璽を魔王に請ひて、降伏の神力を施して」という第六天魔王譚の要素が組み込まれていると言える。

ここで、『訓解』におけるアマテラスの位置づけを確認しておきたい。もとの中臣祓では、「天津神」「国津神」が祝詞を「所聞食」して、人々の罪を消滅させるために姿を現すとされている。この場面に対して、『訓解』は次のような注釈を付していた。

> 請へること有れば必ず致す。祈ること有れば必ず応ず。故に大日四種法身の諸尊、光明心殿を排開き、妙観察智の月、内外十方の性を照らす。〔中略〕天照大神は、大日遍照尊、諸神の最貴の者なり。尊きこと二つ無し。諸々皆眷属に仕る者なり。

中臣祓では「天津神」「国津神」が祝詞に呼応するが、『訓解』では「大日四種法身の諸尊」が祝詞に呼応するとされていた。「大日四種法身」は密教の用語であり、密教では大日如来が様々な姿をとるとされていた。そうした姿を四種類に分類し、四種法身と称する。『訓解』では「天津神」「国津神」といった神々が、そうした大日如来の姿の一つとされていることになる。そしてまた、それら「諸神」の中心となるのが「天照大神」なのであり、「諸神」を「眷属」とし

て従える存在であるとされていた。『訓解』は中臣祓を、大日如来の垂迹である神々に働きかけるものとしており、その際に中心となる神がアマテラスだったのである。『訓解』においてアマテラスは祝詞に呼応する重要な存在であり、その垂迹の次第について語るのが『訓解』の第六天魔王譚であった。

四．第六天魔王譚の文脈

前節で『訓解』の第六天魔王譚の中心である、アマテラスの垂迹の次第について確認した。次に同説話が『訓解』のどのような文脈中で語られたのかを確認する。同説話の冒頭部分に注目したい。

所為は、嘗、天地開闢し初

同説話の冒頭に「所為は」とあった。これは第六天魔王譚の前に書かれている内容を、同説話が「所為」として根拠付けていることを意味する。それでは、『訓解』の第六天魔王譚の前には何が書かれていたのか、次に引用する。

蓋し聞く、中臣祓は、天津祝太祝詞、伊弉那諾尊の宣命なり。天児屋根命の諄辞なり[20]。是則ち己心清浄の儀益、大自在天の梵言、三世諸仏の方便、一切衆生の福田、心源広大の智恵、本来清浄の大教、无怖畏の陀羅尼、罪障懺悔の神呪なり。寔に最勝最大の利益、無量無辺の済度、世間出世の教道、抜苦与楽の隠述なり。天地と与に以て長く存し、日月と将に久く楽しからん。

ここでは、中臣祓の持つ功徳が言葉を尽くして語られている。まず中臣祓が「天津祝太祝詞」であるとされる。これは中臣祓の文中に登場する祝詞の呼称である[21]。また、「伊弉那諾尊の宣命なり。天児屋根命の諄辞なり」と、中臣祓が天上の神々に由来するものであると述べられている。

続いて中臣祓が「己心清浄の儀益」（衆生の心を清浄にする儀式）、「三世諸仏の方便」（過去・現在・未来の仏による衆生を導く手段）、「本来清浄の大教」（衆生の本性が清浄であるという教え）であると語られる。「己心清浄」「本来清浄」といった言葉から読み取れるのは、衆生の心の本性は清浄であり、悟りとは清浄な本性へ帰ることとする発想である。これは、凡夫の心にも如来となる可能性（仏性・如来蔵）が、清浄な本性（自性清浄心）として具わっているとする如来蔵思想の表われである。中臣祓の功徳について『訓解』はその他にも語っているが、それらは「最勝最大の利益、無量無辺の済度」とされるように、中臣祓に一切の衆生を悟りへ導く働きという、仏教的な功徳があると言う点に集約される。

以上をまとめると、中臣祓は神々より伝えられた由緒ある祝詞であり、その功徳は衆生を悟りに導くものである。しかし、なぜ神道の祝詞に衆生を悟りに導くという仏教的な功徳があるのか、ということが問題になる。その「所為」として語られているのが『訓解』の第六天魔王譚であった。

『訓解』の第六天魔王譚によって大日如来がアマテラスとして垂迹した次第が明らかになることで、神道の儀礼である中臣祓に仏教的な功徳があることが根拠づけられるのである。『訓解』の第六天魔王譚は、神々の代表であるアマテラスが、衆生を救うための「大日」の垂迹であることを示すことによって、神々から伝えられた祝

詞である中臣祓が衆生を悟りへ導くことの「所為」を語るものだったと言える。

そのことは、『訓解』の同説話で大日如来が「心王大日」とされていたことにも表れている。先述のように『訓解』は中臣祓の功徳を如来蔵思想によって解釈していた。この思想は大乗仏教の中で広く共有されているが、特に密教では自性清浄心と大日如来を同一視する。例えば、『大日経疏』では「心王毘盧遮那」[22]と、「心王」（心の本体）が「毘盧遮那」（大日如来）であるとし、この「心王」は「心王猶如池水性本清浄」[23]と自性清浄心とされている。『訓解』の第六天魔王譚の「心王大日」もこうした文脈を踏まえたものであり、「心王大日」とは自性清浄心としての大日如来を意味する。『訓解』の同説話において単に「大日」ではなく、「心王大日」と表現されていることは、中臣祓が如来蔵思想の枠組みで衆生を救済することと対応するものと考えられる。

以上のように『訓解』の同説話は中臣祓が仏教的な功徳を持つことを、神話によって根拠付けるものと言える。それによって、以下の中臣祓の解釈を意味づけてゆくものであった。

五．第六天魔王譚の語るもの

では、前節に述べた第六天魔王譚の位置づけを踏まえてあらためて見た場合、『訓解』の第六天魔王譚は全体としてどのような話として受けとめることができるだろうか。それを考えるには、「府璽を魔王に請ひて、降伏の神力を施して」の部分、および末尾の「以降、忝くも大神、外には仏教に異なる儀式を顕し、内には仏法を護る神兵と為る。内外詞異なると雖ども、化度の方便同じ」の理解が重要になる。

まず後者に関しては、佐藤眞人氏[24]によって伊勢神宮の仏法忌避に関わるものと主張された。それは第一節で引用した『沙石集』を始め、多くの第六天魔王譚が伊勢神宮の仏法忌避を説く文脈で語られていることを踏まえている。『沙石集』以外の伊勢神宮の仏法忌避を説く第六天魔王譚として、通海（一二三四～一三〇五）の記した『太神宮参詣記』（以下『参詣記』）を次に引用する。

一、俗ノ云ク。仏法ヲ忌事ハ昔シ伊弉諾伊弉冉尊ノ此国ヲ建立セント思給テ、第六天ノ魔王ニ乞請給シニテ、王ノ申テ云ク、南閻浮提ノ内、此所ニ仏法流布スヘキ地也。我仏法ヲ可忌也トテ、コイ請ケ玉シニヨリテ、仏法ヲ忌也ト申伝ヘタリ。[25]

『参詣記』は、『太神宮参詣記』という名前の通り「太神宮」つまり伊勢神宮を舞台とする。そこに参詣した「僧」と、神官である「俗」の問答によって構成されている。その際『沙石集』と同様に、伊勢神宮の仏法忌避が問題となり、「僧」は「俗」にその由来を尋ねる。引用箇所は「俗」の返答である。「仏法ヲ忌事」つまり伊勢神宮の仏法忌避が、第六天魔王譚に由来すると説明される。ただし、『沙石集』や『訓解』と異なり、アマテラスではなくイザナキ・イザナミが魔王とやり取りをする。伊藤聡氏[26]が指摘するように、イザナキ・イザナミが国造りを行うという記紀神話の内容に合わせたものと考えられる。そうした違いはありつつも、展開は先に引用した『沙石集』のものと変わらない。「此国」つまり日本を「建立」しようとするイ

ザナキ・イザナミは、「我仏法ヲ可忌也」と仏法忌避を宣言し、魔王からこの国を「請ケ玉」った。そのことから伊勢神宮では「仏法ヲ忌」むと説くのである。

このような『沙石集』や『参詣記』の、伊勢神宮の仏法忌避の由来譚としての第六天魔王譚と同列に捉えることによって、『訓解』の同説話も伊勢神宮の仏法忌避に関わると理解されたのである。しかし、あらためて『訓解』の第六天魔王譚をそれ自体として読めば、伊勢神宮の仏法忌避について言及する箇所はどこにも存在しない。それどころか『訓解』には「垂迹の誡むる所は、諸仏の顕戒に通ず」等、神である「垂迹」と「諸仏」の教えの一致が積極的に説かれている。『訓解』の第六天魔王譚は、伊勢神宮の仏法忌避に結びつける他の説話とは、あくまでも峻別して読まれる必要がある。

次に「府璽を魔王に請ひて」について考えていく。第三節で確認したように、『訓解』の第六天魔王譚は「大日」の垂迹の由来を語ることがその中心となっている。その際に、「府璽を魔王に請ひて」とあるのが、他の第六天魔王譚と共通する要素になる。第三節ですでに見たように、人間界を含む欲界の最上位に位置する魔王から統治者をしめす印である府璽を受け取ることで、アマテラスが「閻浮提」の統治者としての資格を得ることを語っている。この部分から『訓解』の成立時点で、第六天魔王譚が一定の形式で流布していたことが示唆されるが、それが伊勢神宮の仏法忌避の由来と結びついていたかどうかは不明というほかない。彌永信美氏[27]が指摘するように、『訓解』の第六天魔王譚は「非常に省略された、暗示的な形で表現されており、おそらくその神話を他のソースから知っている者にしか理解されないような種類のもの」であり、「当時すでに何らかの異伝が存在したと考えるほうが自然だろう。」と推測されるのみである。

「府璽を魔王に請ひて」は「降伏の神力を施して」と続く。「降伏の神力」とは、魔を降伏するための力のことである。「施して」の動作の主体となるのは大日如来の垂迹であるアマテラスであり、アマテラスが魔を降伏する力を何者かに「施し」たということになる。仏菩薩が衆生に、何に対しても畏れを抱かない力を与えることを施無畏と称することを踏まえれば、[28]ここでアマテラスは衆生に対して「降伏の神力を施」したと考えられる。また「降伏」という語は、『訓解』中に次のように見える。

> 祓具、此には波羅閇都母能と云ふなり。贖物は散米・幣帛・金銀鉄人像・弓箭・大刀・小刀類等、皆是悪魔降伏の神兵の具なり。

「祓具」つまり、中臣祓で用いられる道具が「皆是悪魔降伏の神兵の具」であるとされていた。これは中臣祓に「悪魔降伏」の功徳があることになる。第六天魔王譚でアマテラスが衆生に「降伏の神力」を与えることは、中臣祓に「悪魔降伏」の功徳があることと結びついた表現と考えられる。

なお、『訓解』が中臣祓に破魔の功徳があるとするのは、「祓具」に対する注釈だけではない。

> 祓、此を神代の上には、逐之と曰ふ、是を波羅賦と云ふ、云々。其の実を考へ按ふるに、智恵神力を以て怨敵四魔を破す。
>
> 「逐之と曰ふ、是を波羅賦と云ふ」は『中世神道論』の頭注で示されていないが、この部分は『日本書紀』神代上第七段・一書第二の

訓注に「逐之、是をば波羅賦と云ふ」[29]とあることによる。そして、『訓解』は「祓」を「逐之」と書くことと合わせ、「祓」の意味を「智恵神力を以て怨敵四魔を破す」ものと解釈している。また、中臣祓の「天津金木」に対する『訓解』の注釈には「悪魔降伏の金輪」とあり、中臣祓の「繁木本焼鎌敏鎌」に対する注釈には「十魔四魔の大軍」を降伏すると述べられている。『訓解』はその本文中で何度も中臣祓に破魔の功徳があると主張しているのである。こうした主張を根拠づけるものとして、第六天魔王譚の「降伏の神力を施して」は存在している。[30]

ここまでの文脈を踏まえ、末尾の部分にあらためて向き合えば、これも仏法忌避を語るものではなく、中臣祓の解釈に結びついたものとして理解される。「外には仏教に異なる儀式を顕し、内には仏法を護る神兵と為る」の「仏教に異なる儀式」とは、伊勢における神事一般の謂いではなく、中臣祓の儀礼そのものを指すものである。また、「内には仏法を護る神兵と為る」とあったが、この「神兵」という語は『訓解』中に「祓具」に対して「皆是悪魔降伏の神兵の具」とする中で見えていた。つまり、「内には仏法を護る神兵と為る」も中臣祓の破魔の功徳と結びついたものとして理解される。「大神」の「儀式」である中臣祓は仏教のものとは異なるが、「大神」の実態は「仏法を護る神兵」であり、その「儀式」の目的も仏教に適うものである。そして、「内外詞異なると雖ども、化度の方便同じ」とは、仏教（内）と神道（外）では用いられる「詞」が異なるが、どちらも衆生を救済するための手段であると言うことになる。以上のように、ここでも中臣祓という「儀式」と、そこで用いられる「詞」に仏教的な功徳があると述べられていることになる。

『訓解』の第六天魔王譚はあくまでも中臣祓の解釈に結びついたものとして存在していた。その際、特に中臣祓の破魔の功徳がそこでは重要な意味を持っていたのである。

六．終わりに

第六天魔王譚の現在確認される最古の例である、『訓解』の同説話についてこれまで考察を行ってきた。本論では先行研究では看過されていた『訓解』そのものの文脈を踏まえ、中臣祓の注釈書である『訓解』の中で同説話が持った意味を考察していった。そして、『訓解』の第六天魔王譚が、中臣祓において重要な働きをする神・アマテラスの垂迹の次第を述べることで、中臣祓の仏教的な功徳を根拠付けるものであることを指摘し、先行研究で指摘されていたような伊勢神宮の仏法忌避の由来譚ではないことを確認した。

『訓解』では中臣祓に仏教的な功徳があるとしていたが、さらにこの点に関わるのが『訓解』に見られる梵語和語同体説[31]である。『訓解』は中臣祓の功徳を列挙する中で、中臣祓が「大自在天の梵言」であるとしていた。また、中臣祓の注釈の最後に次のように述べている。

已上天益人従り、速佐酒良比咩に至る、天津祝詞、天上の梵語の言なり。

「天益人」と「速佐酒良比咩」は中臣祓に登場する単語である。「已上天益人従り、速佐酒良比咩に至る」は、中臣祓の「天益人」から「速佐酒良比咩」に至るまでの部分を指している。中臣祓のこの部

分というのは、「天益人」（人民）が犯した様々な罪を、「速佐酒良比咩」を始めとする神々が消滅するという、中臣祓の中核とも言える部分である。『訓解』はこの部分が「天津祝詞」（天上の祝詞）であり、「天上の梵語の言」であるとしていた。

つまり、『訓解』は中臣祓が日本に起源を持つにも関わらず、天竺の言葉である梵語と一致するとしているのである。[32] 天竺とは仏教の発祥地であり、仏教的な世界像における中心である。古来より持ち伝えられてきた祝詞である中臣祓が梵語であるということは、中臣祓がそのままで仏教的な世界像の中で意味を持つことになる。こうした中臣祓の解釈を支えるのが、『訓解』の第六天魔王譚であったと言えるだろう。『訓解』の同説話によって、日本とは大日如来が垂迹した仏法流布の勝地であり、アマテラスとは慈悲にもとづく大日如来の方便であることが提示された。日本という地、そしてアマテラスを始めとする神々が、仏教的な世界像において重要な意味を持つことになる。これによって、神道の祝詞である中臣祓はその起源を日本に持ちながらも、そのままで仏教的な功徳を持つとされたのである。そしてそれは中臣祓を持ち伝え、神道を奉じて来た日本の人々を、仏教的な世界像という普遍性を持った世界の中に位置づけることでもあった。

以上、本論では『訓解』の第六天魔王譚について論じてきた。第二節で言及したように、『訓解』はその後の中世神道を準備したテキストとして位置づけられる。しかし、『訓解』全体の主題がどこにあるのかという点は未だ十分に説明にされて来なかった。本論で明かになった『訓解』の第六天魔王譚の位置づけを踏まえ、『訓解』全体の主題を明らかにすることが今後の課題となる。

注

1 新編日本古典文学全集五二『沙石集』（小学館、二〇〇一年）による。なお、本論の引用は元の表記にかかわらず全て通行の字体に改めた。

2 伊藤聡『中世天照大神信仰の研究』（法蔵館、二〇一一年）がアマテラスと大日如来の習合（第一部「天照太神と大日如来の習合――中世における神祇と密教」第二部「変容する天照大神――同体説の諸相」）と、伊勢神宮への僧侶の参詣（第五部「天照大神信仰と僧徒――その言説形成を担った人々」）について詳細に論じている。

3 国訳一切経　印度撰述部　本縁部四『過去現在因果経・衆許摩訶帝経・佛所行讃』（大東出版社、一九九六年）による。

4 第六天魔王譚の広がりについては、彌永信美「第六天魔王と中世日本の創造神話（上）（中）（下）」（『弘前大学国史研究』一〇四・一〇五・一〇六、一九九八年三月、同年一〇月、九九年三月）が詳しい。特に（下）の「付録」第六天魔王神話の各種の異伝」は第六天魔王譚を含むテキストの一覧となっている。

5 伊藤正義「中世日本紀の輪郭――太平記における卜部兼員説をめぐって」（『文学』四〇―一〇、一九七二年一〇月）。

6 第六天魔王譚については、注4彌永論文を始めとして多くの先行研究が存在する。阿部泰郎「魔王との契約――第六天魔王

神話の文脈――」（武久堅監修『中世軍記の展望台』和泉書院、二〇〇六年）、伊藤聡「第六天魔王譚の成立――国土創成神話の中世的変奏」（『中世天照大神信仰の研究』法藏館、二〇一一年。初出『日本文学』四四―七、一九九五年七月）、同「中世神話の展開――中世後期の第六天魔王譚を巡って」（前掲『中世天照大神信仰の研究』。初出『国文学解釈と鑑賞』六三―三、一九九八年三月）、同「中世における古代神話の継承と変容」（『神道の形成と中世神話』吉川弘文館、二〇一六年）、片岡了「第六天魔王の説話」（『沙石集の構造』法藏館、二〇〇一年。初出『文芸論叢』四四、一九九五年三月）、金沢英之「中世におけるアマテラス――世界観の組みかえと神話の変容」（『宣長と『三大考』――近世日本の神話的世界像』笠間書院、二〇〇五年。初出『国語国文』六七―五、一九九八年五月）、芹澤寛隆「日蓮遺文の真偽：説話の内容を軸として」（『宗教研究』八九―三、二〇一五年一二月）、藤巻和弘「『長谷寺縁起文』天照大神・春日明神誓約譚をめぐって――第六天魔王の登場と『長谷寺密奏記』との照応――」（『国文学研究』一二七、一九九九年三月）等を参照。

7 岡田荘司「『中臣祓訓解』及び『記解』の伝本」（『神道及び神道史』二七、一九七六年四月）、同「中世初期神道思想の形成――『中臣祓訓解』・『記解』を中心に」（『日本思想史学』一〇、一九七八年九月）、同「両部神道の成立期」（安津素彦博士古稀祝賀会編『神道思想史研究』同祝賀会、一九八三年）、神道大系古典註釈編八『中臣祓註釈』（神道大系編纂会、一九八五年）の解題（岡田荘司氏による）を参照。

8 以下、中臣祓の基本情報については神道大系古典註釈編八『中臣祓註釈』（神道大系編纂会、一九八五年）の解題を参照。

9 神道大系古典註釈編六『祝詞・宣命註釈』（神道大系編纂会、一九七八年）による。

10 以下、中臣祓の引用は新訂増補國史大系『朝野群載』所収の「中臣祭文」による。

11 新編日本古典文学全集『和泉式部日記　紫式部日記　更級日記讃岐典侍日記』（小学館、一九九四年）による。

12 岡田荘司「中臣祓信仰について」（『神道古典研究』一〇、一九八九年二月）、伊藤聡「神祇信仰の場と『文』――中臣祓の変容」（中公選書『神道の中世』中央公論社、二〇二〇年）、斎藤英喜「いざなぎ流の神々――呪詛神と式王子をめぐって」（『増補陰陽道の神々』思文閣出版、二〇一二年）など。

13 注12、岡田、伊藤、斎藤論文。桜井好朗「六字河臨法の世界」（『日本文学』四四―七、一九九五年七月）など。

14 『大正新脩大蔵経　図像部』九巻一六九頁ａによる。

15 本論における『中臣祓訓解』の引用は神道大系古典註釈編八『中臣祓註釈』（神道大系編纂会、一九八五年）所収の「中臣祓訓解」により、私に書き下した。書き下しにあたって同『中臣祓註釈』所収の『訓解』の異本「中臣祓記解」（以下、『記解』。本論の『記解』の引用は同書による）、日本思想大系一九『中世神道論』（岩波書店、一九七七年）所収の「中臣祓訓解」を参照した。

16 久保田収『中世神道の研究』（神道史学会、一九五九年）。

17 神道大系古典註釈編八『中臣祓註釈』（神道大系編纂会、一九八

五年）所収の「中臣祓訓解」では「所為（以ニ）」とあり、同『中臣祓註釈』所収の『訓解』の異本『記解』では「所（ユヘイカントナレハ）為」とする。日本思想大系『中世神道論』では「所以に」と書き下しているが、本論では前後の文脈を踏まえ、『記解』を参考に「所為は」と書き下した。前後の文脈については第四節で改めて触れる。

18 日本思想大系一九『中世神道論』（岩波書店、一九七七年）頭注。

19 日本古典文学大系七一『三教指帰・性霊集』（岩波書店、一九六五年）による。引用にあたって句読点を改めた。

20 『訓解』の原文では「諄解」となっているが、『記解』では「諄辞」となっている。この部分は『日本書紀』神代上第七段・一書第三の「乃ち天児屋命をして、其の解除の太諄辞を掌りて宣らしむ」（岩波文庫、一九九四年）を踏まえていると考えられ、「諄辞」が適切であるとして改めた。

21 『延喜式』所載の六月晦大祓の祝詞では「天津祝詞太祝詞事」とされている。神道大系古典註釈編八『中臣祓註釈』（神道大系編纂会、一九八五年）の、六月晦大祓の祝詞と中臣祓の諸本の校異によるとこの部分には様々な異同が存在し、その中に『訓解』と同じく「天津祝乃太祝詞」（『中臣祓注抄』第三部の中臣祓）とするものが存在する。

22 『大正新脩大蔵経』三九巻（No.1796）五八〇頁bによる。

23 注22同六〇三頁aによる。

24 佐藤眞人「貞慶『神祇講式』と中世神道説」（『東洋の思想と宗教』一八、二〇〇一年）。なお、榎本純一「『神道集』と神道思想」（『論究日本文學』四五、一九八二年五月）や、注6前掲、伊藤聡「第六天魔王譚の成立――国土創成神話の中世的変奏」も同様に、『訓解』の第六天魔王譚を伊勢神宮の仏法忌避に関わるものとして理解している。ただし、佐藤氏が第六天魔王譚の主題を伊勢神宮の仏法忌避（三宝忌避）を説くことにあると主張したのに対して、伊藤氏は「魔王から大日如来＝天照大神への譲国を説くことに主眼」があるとした。その際、最古の第六天魔王譚である『訓解』の同説話が、「三宝忌避について語っていることは明白」（佐藤氏）なのか、あくまで「三宝忌避を匂わせてはいる」（伊藤氏）だけにとどまるのか、という点が重要な論点となっていた。

25 日本庶民生活史料集成　第二六巻『寺社縁起』（三一出版、一九八三年）による。

26 注6前掲、伊藤聡「第六天魔王譚の成立――国土創成神話の中世的変奏」。

27 注4彌永論文（中）。

28 「施無畏」については『岩波仏教辞典第二版』（岩波書店、二〇〇二年）を参照。

29 『日本書紀（一）』（岩波文庫、一九九四年）による。

30 アマテラスが魔王から府璽を請い受けることと、衆生に魔を降伏する神力を施すことは、魔に対する態度として矛盾があるように思われるが、必ずしもそう捉える必要はない。注4彌永論文（下）が指摘するように「密教の降伏思想には、降伏する尊格と降伏される神、または悪鬼などが基本的に「同質」のものである、という考え方がある。仏教的、出世間的な「大貪」が

世間的な「貪」を〔中略〕降伏する、という思想である（密教の「等流身」はそうした思想の上に成り立っている）。第六天魔王の神話にも、当然、同様の思想が前提されていたと考えることができる」のである。魔に対するアマテラスの両面性も、そうした背景のもとに理解される。

31 梵語和語同体説については、伊藤聡「梵漢和語同一観の成立基盤」（『中世天照大神信仰の研究』法蔵館、二〇一一年。初出、院政期文化研究会編『院政期文化論集第1巻　権力と文化』森話社、二〇〇一年）、彌永信美「はるかなる悉曇文字」（『現代思想』一一―九、一九八三年九月）、小川豊生「幻想の悉曇」（『中世日本の神話・文字・身体』森話社、二〇一四年）を参照。

32 中臣祓と梵語（天竺）を結びつける同種の説として中臣祓翻訳説が存在する。これは中臣祓が日本古来の祝詞ではなく、梵語・漢語から和語に翻訳されたとする説である。これは中臣祓の起源を唐や天竺に擬すことによって、仏法東漸の歴史観の中で、中臣祓の仏教的な功徳を根拠付ける説である。中臣祓翻訳説の詳細については、伊藤聡「中世における祝詞と和歌の習合」（『神道の形成と中世神話』吉川弘文館、二〇一六年）、および注12伊藤論文を参照。

（おだじま　りょう・北海道大学大学院博士後期課程）